隊長と海

-Taicho to Sea-

隊長と海
-Taicho to Sea-
!!CAUTION!!
この本に登場するキャラクターは全員18歳以上です

INDEX

隊長と海 ……3

次回予告 ……23

!!CAUTION!!

この本に登場するキャラクターは全員18歳以上です

とある無人世界

《……でね、まぁ今目の前にいる構成のモジャメガネ(笑声)とガラスの向こうに居るガンバと仲間達ですよ。ハドソンリバーにぷかーっとうつ伏せで浮かぶのがまず確定でおなじみの奴ら(笑声)なんですけど！こいつらとですね、膝突き合わせて話し合った結果、来週のSPウィークのテーマはこれです！

『ジュラルミンケースの角でこめかみぶっ叩きスペシャル！』(構成の笑声)
　そう！いくらゼロハリの角が丸いからってガツーンガツーン！ってね！死ぬけど！
　…まぁそれはボツなんですけどね、死ぬから！
　本当のSP企画はこれ！

『がんばりママのアイデア発明で学校が大惨事スペシャル！』(笑声)
　ママーッ！ママーッ！あー！マサシちゃん！マサシちゃん！！あぁぁ、良かれと思って作ったこの〈反物質で暖める簡単弁当ウォーマー〉さえ持たせなければぁぁぁぁぁぁ！
　という光景で家庭の団欒を暖めようと……》

ラジオの音声を右から左に聞き流しながら、高町なのははビーチチェアに腰掛けて一人海を眺めていた。
　近代文明のある世界ならば、きっと盛況な海水浴場になっていたであろうこの海岸は、今は彼女一人をその観客としてその雄大な姿を見せていた。
　いや、もう一人――――

「なのは、すごく素敵なところだね」
「フェイトちゃん」
　離れたところで海水浴を楽しんでいたフェイトが戻ってきた。
「こんなにいい所なのに、レジャーや観光で来る人が居ないなんて不思議だね」
「まったくいないわけじゃないんだけどね……でも、その中でもココは本当に穴場中の穴場。以前任務でココに来たときに初めて見つけてから、時々ここに来てたんだ」
　ジュースを傍らに置き、なのははチェアーに体を委ねながらフェイトに手招きした。
「この風景を見てるとすっごく心がやすまるの……つらい事や悲しいこと、心の中のいろんなものが一緒に流されていくようで……」
「なのはにもそういう時が、あるの？」
　ちょっと眉根をひそめ、フェイトは尋ねた。
「うん…やっぱり、悲しい事件やつらいことがあったときは、さすがにね……。教導官という仕事も決してそれらと無縁ではないし」
「なのは…」
「だから、ヴィヴィオにも話せないそういう時は、ここで波と一緒に洗い流して貰ってるの」
「そうなんだ……」
「でも、一番つらいのは……」

　ガバッ――――

「えっ？」

「なの……は？」
　不意に腕を引っ張られ、フェイトは寝そべったなのはの上に覆いかぶさるような態勢になった。
「一番つらいのは…艦隊勤務でフェイトちゃんとこの数ヶ月間会えなかったことだよ…」
　そう続けたなのはに、フェイトは絶句した。
「フェイトちゃんが『チャクリ・ナルエベト』に乗り組んで行ってからずっと亜空間通信も制限されてたし…」
「ごめん、なのは……私も、なのはやヴィヴィオと離れるのは…辛いんだ…けど……」
　フェイトは申し訳なさそうに俯く。
「ううん、責めてるんじゃないの…ただ、知って欲しかったんだ」
「知って……？」
　うん、とうなづいて上体を起こしたなのはは、フェイトの唇に指を当てて悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。
「————ここがとてもすばらしい場所で、私がここで癒されて……そして、フェイトちゃんと一緒に来たい場所だったんだっていうこと」
「なのは……」
「今日はこのまま、フェイトちゃんとここで過ごしたいな……」
「なのは、それって……」
　フェイトは自分の胸が熱くなるのを感じた。

　————むにっ

　……が、同時に自分の片方の胸が軽くなるのも感じた。

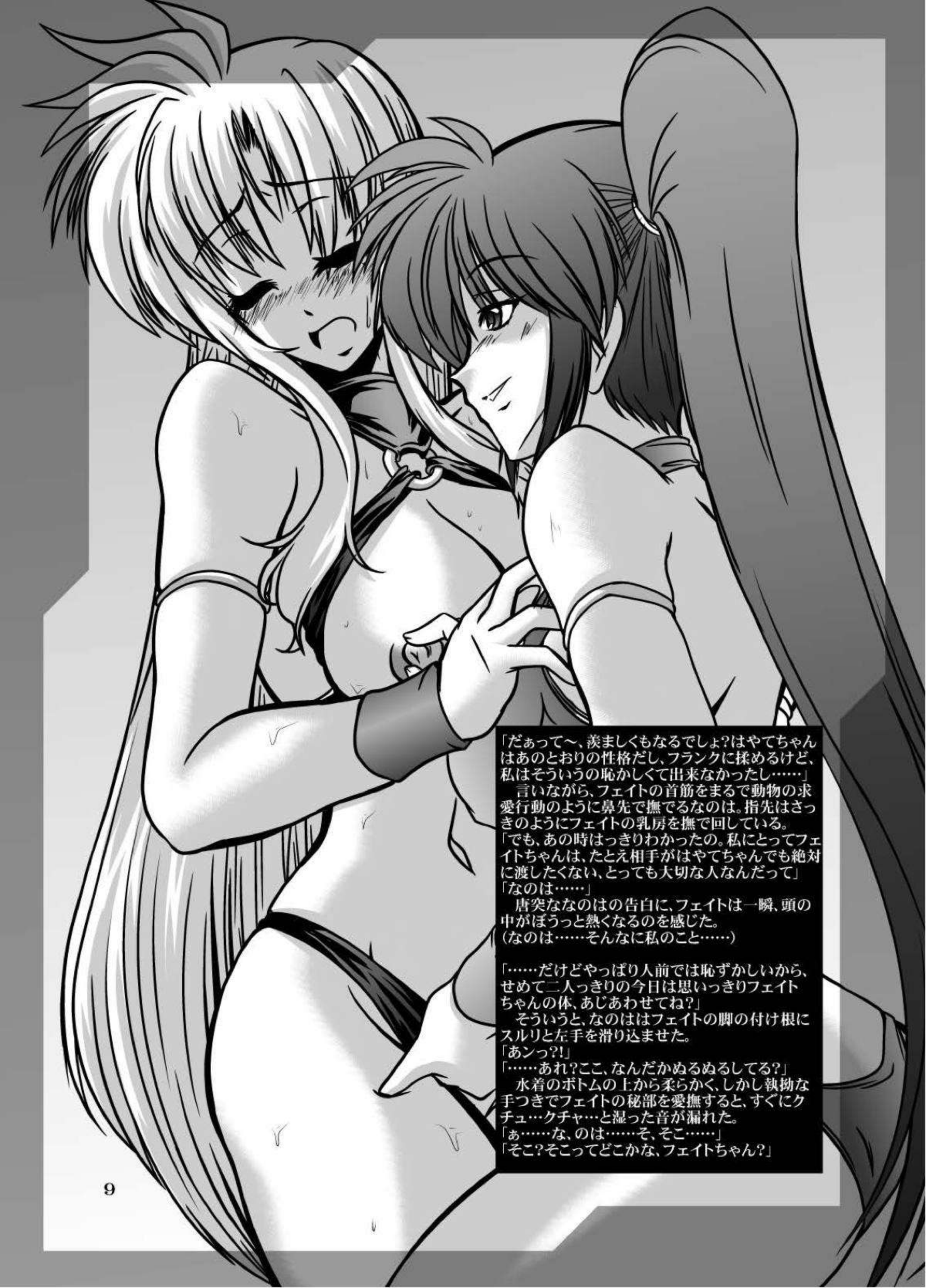
「あっ…」

むにっ　　むにゅっ　　むににっ

「……すごぉい…フェイトちゃん、もしかしてまた胸大きくなってない？」
「あぅっ……なのは、その…過ごすって…ぁ…やっぱり…そういう意味……んっ」
なのはの執拗な手つきに戸惑いながら、フェイトは抵抗はしなかった。
「だぁってぇ、フェイトちゃんが居ない間、ずっと寂しかったんだよ？もし今回の長期任務が長引いたりしたらガマンできずに『チャクリ・ナルエベト』に行っちゃおうかっていうくらい！」
「そ、そんな…今回は極秘任務で…その……」
「解ってるけど、それくらいガマンの限界だったんだから！フェイトちゃんだって、そうでしょ？」
「それは…そ、そうだけどぁ、そ、そんな…激しく…」
胸をまさぐる手の速度が上がった。フェイトの呼吸が荒くなる。
「だから、今までガマンしてた分を取り戻す勢いで、今日は二人っきりでおもいっきり楽しもうね」
「ぁ…ぁう、うん……ぁ……」
ぼうっとなった思考が理性を押し流し、フェイトは無意識のうちに頷いていた。

なのはの左手がフェイトの腰裏に回り、優しくゆっくりと円を描くように這う。その指先が水着と肌の境界線をなぞるように動くと、フェイトはくすぐったいようなしびれるような、表現しがたい感覚におもわず腰が浮いた。
「ぁ……や……く、くすぐったいよォ…」
「あはっ、相変わらず敏感だねフェイトちゃん」
反射的に上がったフェイトの片手に右手の指を優しく絡ませて引き寄せると、フェイトはその体重の大半をなのはに委ねる態勢になった。
「フェイトちゃんの水着、すごくエッチだね……こんなに少ない布地で、お股のところなんか、毛の処理を怠ったらはみでそう……」
「そ、そんな…ぁンッ！んっぁ！」
なのはの指がわき腹に伸びると、フェイトは大きくのけぞった。その勢いで胸が大きく揺れる。
「こっちも今にもリングが外れてポロンしちゃいそうだね……本当にすっごくエッチ…」
「あぅ…な、なのはにしか、見せたことない…よ…この水着……」
「本当？うれしいな……わたし今、フェイトちゃんのいやらしい姿を独り占めしてるんだ……でも、もっともっとエッチな姿も私だけのものにしたいな？」
「も、もっと……？」
フェイトの怪訝な目に、なのはは胸元のリングに鼻先をうずめて答えた
「そう…このエッチな水着が隠してる、もっとエッチなフェイトちゃんの肢体(からだ)……」

「う、ん…なのは、こ、これでいい？」
　胸元の布をめくり上げて乳房を露出したフェイトの姿を、上から下まで眺めると、なのはは満足そうに頷いた。
「うん、やっぱりフェイトちゃんの胸、また大きくなってるよ」
「な、なのは……そんなこと……」
　かぁっと羞恥心が湧き上がり、フェイトは思わず身をちぢ込ませた。その肩に、なのはがゆっくりと両手を添える。
「ねぇ、覚えてる？ずっと前に私、はやてちゃんと喧嘩したことあったよね、フェイトちゃんとのことで」
「え……あ、そういえば……たしか、はやての悪い癖で…」
　フェイトの脳裏に蘇ってきたのは機動6課設立よりもずいぶんと前の記憶だった。
「そう、はやてちゃんがあんまりフェイトちゃんのおっぱいを独り占めするから、思わず私、『そんなにおっぱいが好きならおっぱいと結婚すればいいじゃない！』って泣きながら言っちゃって……なんであの時、あんなに必死だったんだろ……？」
「というか…あの時本局の食堂での喧嘩だったから、私ほんとになのはがどうにかなっちゃったものかと……」



「だぁって〜、羨ましくもなるでしょ?はやてちゃんはあのとおりの性格だし、フランクに接めるけど、私はそういうの恥かしくて出来なかったし……」
　言いながら、フェイトの首筋をまるで動物の求愛行動のように鼻先で撫でるなのは。指先はさっきのようにフェイトの乳房を撫で回している。
「でも、あの時はっきりわかったの。私にとってフェイトちゃんは、たとえ相手がはやてちゃんでも絶対に渡したくない、とっても大切な人なんだって」
「なのは……」
　唐突ななのはの告白に、フェイトは一瞬、頭の中がぼうっと熱くなるのを感じた。
(なのは……そんなに私のこと……)

「……だけどやっぱり人前では恥ずかしいから、せめて二人っきりの今日は思いっきりフェイトちゃんの体、あじあわせてね?」
　そういうと、なのははフェイトの脚の付け根にスルリと左手を滑り込ませた。
「あンっ?!」
「……あれ?ここ、なんだかぬるぬるしてる?」
　水着のボトムの上から柔らかく、しかし執拗な手つきでフェイトの秘部を愛撫すると、すぐにクチュ…クチャ…と湿った音が漏れた。
「ぁ……な、のは……そ、そこ……」
「そこ?そこってどこかな、フェイトちゃん?」

「ど、どこって……その……」
「どうしたの、言えない？」
　巧みに体勢を入れ替えフェイトの後ろにまわったなのははフェイトの耳元へ息を吹きかけるように囁く。その間も責めは忘れず続けていると、次第にフェイトの息が荒くなってきた。
「んっ……んふ……ぁ……あの…私の、は、恥ずかしいところ……」
「それじゃ抽象的すぎるよフェイトちゃん？もっと『ココが気持ちいいです』とか、『そこはやめてください』とかあるよね？たとえば…」

——————ぐちゅっ

「んぁああっ！？」
「ほら……イイでしょ、ココ。フェイトちゃんはココを普段なんて呼んでるの…？」
「そっ…そんな恥ずか…んっあ！あぁ…」
「もし教えてくれるなら……ふふっ」
　『もっとイイことしてあげるよ』という言外の誘惑に、フェイトは理性がゆっくりと融解していくのを感じた。
「あ、あぅ……ぁ……んこです……」
「なに？聞こえないよフェイトちゃん？」
「ぅ……ぁあ…ひっ……ぁ…お、オマ●コ…オマ●コです……私の…淫乱オマ●コです…っ！オマ●コ……もっと、もっとイジめて、なのはァ……」
　最後の哀願はなのはも予想外だった。
「そ、そこまでは求めてなかったけど…まぁ正直に言った、ことにはなるの…かな？」

「……そ、それじゃぁイイこと教えてあげるね？
実は、ひとつサプライズを用意してるんだよ」
「サプ…ライズ？」
　予想外の言葉に、フェイトは鸚鵡返しのように繰り返した
「そう、サプライズ。せっかく長期航海から帰ってきたのに、少ししたらまた新しい艦で任務でしょ？だから今日はちょっと詰め込みすぎなくらいに予定入れてみたんだ」
「それは…嬉しいけど、いったいどんな……？」
「ヒ・ミ・ツ」
　悪戯っぽく言って、なのははフェイトに顔を寄せた。お互いの吐息さえかかりそうな距離まで近づくと、不意にフェイトの乳房に指を這わせる。
「あっ…」
「勿論、フェイトちゃんならきっと…ううん、間違いなく気に入ってくれるはずだよ。こういう意味で」
「な、のは……んっ…」
　乳房の下半分に這わせていた指が次第に上がり、先端の突起をやさしく撫ぜる。
「ぁ……、ん、わたし…なのはが用意してくれたのなら……どんなものでも……」
「本当？」
「ひぁっ？！」
　不意に指の力が強まり、フェイトの乳首を挟み込むように締め上げた。
「もしかしたら、凄く痛いことかもしれないし、恥かしことかもしれないよ？」
「ぁ……い、いいの…なのはにしてもらえるなら、私…身も心もなのはのモノだから……」

「さぁ、着いたよフェイトちゃん」
　転送魔法でたどり着いたのはわずかな照明で照らされた隠微な雰囲気の漂う部屋だった。
　四方の壁に窓はなく、代わりと言うには自己主張の激しいX字型の板――――四隅に革ベルトの拘束具を吊るした「X字磔」が埋め込まれていた。
「ここはね、フェイトちゃんの大好きなSMプレイ専門のお店なの…驚いた？」
「！！」
　耳元でささやく様に言われた瞬間、フェイトの両肩がそれと解るくらいはっきりと震えた。
　驚愕と恐怖…だけではない何かが彼女の背筋を雷のように貫いたのだ。思わず強張ったフェイトの表情を素早く読取ったなのははさらに顔を寄せ、フェイトの首筋にやさしく鼻頭を当てながら続けた
「フェイトちゃん、震えてる？」
「え…う、うん……その…」
　答えようとするフェイトだが、その視線は部屋の各所に据付けられた様々な器具――ギロチン台、木馬、拘束椅子　などにせわしなく動いてその答えと同様定まらなかった。
「安全にプレイできて、秘密が守れるようなお店を探すの、結構大変だったんだよ？
　それに、もう1つサプライズがあるの」
「もう……ひとつ？」

《Mistress mode》

――――――シュウウウウウウウン――――――

一瞬の光の後、フェイトの目の前には水着姿から一転してボンデージ風のBJを身に纏ったなのはがいた。
「……どう？今日のプレイのために用意した《ミストレスモード》だよ」
乳房を搾り出すように露出させたデザインのBJは、いつものなのはからは想像も出来ないほど淫猥なものだった。
フェイトは親友のあまりの淫蕩な姿から顔を背けようとしたが、出来なかった。倫理感よりももっと大きな、自分の心の奥底にある何かがそれを拒んだのだ。
それが何なのか、フェイト自身よく解っていた。なのはの言うとおり、彼女自身がいつも望んでいたことなのだ。

（あぁ……私、これから調教されるんだ…夢にまで見た、なのはの手で……）

フェイトの眦がトロンと下がり、さっきまでの緊張が溶けるように弛緩していくのを見てとったなのはは、普段の姿からは想像できないくらい妖しい微笑を浮かべ、手にした簡易デバイスをフェイトにかざした。
「フェイトちゃんのためのもデザインしてきたんだ……今夜は朝まで、フェイトちゃんを思いっきり可愛がってあげるね…！」

十数分後――――――
「ん……むぐ…」
「あはっ、やっぱりフェイトちゃんは黒系が似合うよね。真ソニックフォームを参考にして正解だったなぁ」
　天井のチェーンブロックから下げられた鎖に両手を拘束され、フェイトはなのはのなすがままにされていた。黒のレオタードとニーソックスの上から革ベルトの拘束具で締め上げられた姿は一見すれば彼女の奥の手である「真ソニックフォーム」に見えなくもない。
「こうしてみると、フェイトちゃん、まるで戦いの末に負けて、敵に捕らえられたような状況だよね。私はさしずめ、捕まえた管理局の執務官から情報を聞き出す拷問吏かな？」
「(ご……拷問……私が…)」
　恐怖とともに言い様のない甘美な響きを覚えるその言葉に、フェイトは思わず身震いした。股間を締め上げるベルトがその震えを敏感に伝え、予期せぬ電流が秘部から駆け上ってくる感覚にまた身を震わせる。
「んぅっ！んんぅぅぅっ！！」
「あれ？私まだ何も……もしかして、拷問って言葉だけでキちゃった？」
　なのはの瞳がかすかに妖しく光る。獲物を見つけた狩人の目だ。本能的に危機感を覚えたフェイトは慌てて首を振るが、
「そっかぁ……ふふふっ、フェイトちゃんは拷問してほしいんだぁ……。それなら――――」

「――――それじゃぁ、まずはコレだね」
　そう言ってなのはが手元の端末を操作すると、ガコン、という音がフェイトの足元から聞こえた。怪訝に思って視線を真下に向けると、自身の双房の間から、床下からせりあがってくる三角形の柱――――木馬の胴部分が見えた。
「？！…ん、んぐぅ？！」
「ふふっ、怖い？でも心配要らないよフェイトちゃん…。ホラ」

　カチッ――ヴ゛ヴ゛ヴ゛ヴ゛ ヴヴヴヴヴヴ

　木馬の背が激しく震動を始めた。胴部自体が巨大なバイブレーターになっているのだ。

「(あぁ……こ、こんなに激しいバイブ……これがもうすぐ……)」
「そう、もうすぐフェイトちゃんのオマ●コがこの震動に責め立てられるんだよ……ローションで濡らしてるからスベリも良くて安全だし」
　無意識のうちに念話が漏れていたのか、フェイトの思考の後を継いでなのはが答えた。
「――木馬の高さは自由自在。フェイトちゃん次第でバイブ震動での快楽責めだけというのもできるし、本当の木馬責めにも……」
　内股にローションの冷たい感触と激しい震動が伝わり始めた。次第に強くなるそれに、フェイトは床下の金具に拘束されたつま先を立たせ、なんとか逃げようとあがく。しかしそうやって身を捩じらせ、必死にもがきながらも、フェイトは愉悦交じりの感覚を覚えていた。
「(あぁ…私、もうだめ…こんなはしたない姿で……なのはの前で浅ましい姿を晒しちゃうんだ……ぁ……き、きた！ぁ、や、ぁあああ…な、なのは…み、見て…私の淫乱な本性を…ぁあああ――――っ)」

――――ピチャ――――クチュ――――

秘部から水音が小さく爆ぜるたび、快楽の漣がフェイトの脊椎を駆け上る。その源に視線を向けたい、とは思うものの、自分の首と両手を縛める無情な拘束具――ギロチン台によってそれは叶わなかった。

ギロチン台は黒塗りのひし形を三つ連ねた形状をしている。フェイトはそれぞれのひし形の中心に設けられた開口部に首と両手を拘束され、体全体で大きく"ぐ"の字を描くように立たされていた。

プレイ用なので本物の断頭台とは違い刃はついていないが、フェイトはまるで自分が処刑を待つ罪人になったような錯覚を覚えていた。

「ん…んくっ…ふぅぅぅ～っ！！」

「うわぁ、どんどん溢れてくるよフェイトちゃん」

なのはの声にも首をめぐらせることすらできず、ただ彼女の指先が自分の秘唇で生み出す快感に身をよじらせて耐え忍ぶことしかできなかった。

「すごいね…まるでオシッコみたいに後から後から……フェイトちゃんのオマ●コ、洪水状態だね」

「ぅぐ……んむぅ……(なのは…ぁ……い、言わないで……)」

なのはの言葉の一つ一つが、指先と同じ淫猥な責め具となってフェイトの脳髄に響く。

「管理局の執務官がこんな淫乱オマ●コだなんて、外に知られたら大変だよね……。私だけのものにしなくちゃ」

「(あぁ……！私、なのはだけのオマ●コだよ！どんな辱めも、どんな快楽もなのはがしてくれるから……なのはが受け入れてくれるから……！！)」

「んっ……ぁ…あは……じ、上手だよフェイトちゃん。……でも、もっと、いつもみたいに積極的に…んっ……し、してくれても、いいかな……」
「んむ……ぷはっ……う、うん…」

拘束から解かれたフェイトは、なのはの秘部への舌奉仕をさせられていた。
「んふ……ぁぅ、そ、そう……舌で…ぁ…もっと強く……」
なのはの股間に布の上から舌を這わせて初めて気づいたが、彼女の秘部は既に汗だけではない、愛液の混ざった独特の牝臭が濃く漂っていた。
「(なのは……なのはも感じてたんだ…私のはしたない姿を……縛られて、苦痛や辱めを受けて感じる私を見て……)」
今までのプレイですら隠していた(フェイトの主観でしかないが)自身のM性を見破られていたことも驚きだったが、なのはがそれを受け入れてくれたことも想像だにしないことだった。
「ぁ…はぁ……っ！」
ひときわ大きな声をあげてのけぞるなのは。小刻みに震える股布に舌を這わせていたフェイトは、その先端で愛液がジワリと股布から染み出てきたのが解った。
「(な、なのは……もしかして…？)」
「あ、アハ……か、軽く…イッちゃった……フェイトちゃん、う、上手すぎ……これじゃ、ど、どっちが責めなのか、わ、わかんないね…ふぅ…ンっ…」

「んふっ――――コレ、どうかな？」
「な……っ　なのは……ソレ…？！」
　部屋に戻ってきたなのはの股間には、巨大なディルドゥが聳え立っていた。
「(す、すごい……あ、あんなに太いの……母さんの御仕置き以来……)」
「これ、今日のために用意してきたの。買うのすっごく恥ずかしかったんだから……」
　少し顔を赤らめながらなのははフェイトの鼻先でディルドゥの先端を軽く揺らした。皮の表現や皺をリアルに再現したソレは、一見すると本物の怒張に見えなくもない。もっともフェイトには本物を見た経験がないのでその辺に関してはナンともいえないのだが。
「なんというか…男の子の気持ちがちょっと解る気がするね、この存在感……！」
「あぅ…こ、こんなすごいのがなのはのアソコから生えてるのって……すごくいやらしくて……すごく、キレイ…」
「ふふふ、ありがと♪」
　ニッコリ笑って、なのははフェイトの頬に感謝のキスを送る。フェイトはお返しのキスの後、少しためらったが続けてディルドゥの先端にもキスをした。
「あンっ」
「？」
「あ……ご、ごめん言ってなかったね。コレ、魔法で感覚を持たせることができるんだ…」
「す、すごいねそれ……私、これで…犯されちゃうんだ……男の子になったなのはに…まるで犬のように……」
　まるでうわごとのようにフェイトはつぶやく。なのははそれを満足そうに見下ろした。

「――――それじゃ、今言ったみたいにね？」
「う、うん……でも、ちょっとはずか…ぁあンっ！……ぁぅ…ご、ごめんなさい…」
　軽くつね上げられた乳首の熱を意識の片隅に残して、フェイトは部屋の真ん中に据えつけられたベッドへと上がった。なのははその横に置かれた椅子に腰掛け、薄く微笑を浮かべながらフェイトの次の動作を待っている。
　フェイトは股間を締め上げているベルトを一部はずすと、レオタードの股部分を横へずらし、汗と愛液で濡れそぼった秘部をさらけ出した。そのまま脚を大きく開き上体をのけぞらせると、恥辱と期待に入り混じった瞳でなのはをまっすぐ見つめた。
「ぁ……あの……」
　一瞬ためらうが、なのはが無言のまま続きを促すように頷くと、覚悟をきめたように瞼を閉じ、再び開いて続けた。
「ぅ…わ、たしは……フェイトは、い、苛められて喜ぶ変態マゾ執務官です……。あ、愛する人のおち…おちんちんが欲しくて、こんな……こんな格好でおねだりする…淫らな犬です…
　ぁ、ぅ……だ、だから、な、なのはのおちんちんで…私の淫乱マ●コを、そのディルドゥでく、串刺し刑にしてくださ……ぃ…」
「……よく言えたねフェイトちゃん。すっごく可愛いよ……ご褒美に、フェイトちゃんの望みどおり、思いっきり犯してあげる」

――――ズンッ！
「ぁ……あああっ！！」
「んっ……ぁ…や…す、すごぉ……いいっ！」
「あ、あは……フェイトちゃん、もう膣内ヌルッヌルですごぃ……んっ！」
「ひ、ひぁぁ……い、言わない…で…」
「それに…すごいきつい……ぁ……あは…い、いいよ、フェイトちゃんの……オマ●コ」
「ぁ…あぅぅ……」
「いい？フェイトちゃん……う、動くよ……」
「んはぁっ！　な、なのは……い、今動いたら……ぁぁあああっ！」
20

――――ズンッ　ズチュッ　ズッ――――
「あぁあっ！あンっ！い、いひぃいっ！！」
「ん…ふぅっ！んぁ…す、すごい……フェイトちゃんの…締め付けてくるぅぅぅっ！！」
「ひぁっ…あ、あぅぅぅ……な、なのはのも…熱いよ……熱いよおおおおっ！！」
――――ぐちゅっ　ちゅぷっ――――
「も、もっと…はげしくシて……なのはぁ……っ」
「で、でも……これ…でぃ、ディルドゥすごいよ……わ、私こんなの……はじめ、て……っ」
「あンっ！ひぐっ！んぁあああああっ！」
――――ぎしっ　ぎぃっ――――
「ぁ……だ、ダメ…く、くる……ぁ…な、なのはに犯されて…アクメ、くるぅぅぅぅっ！！」
「わ、私も……ふ、フェイトちゃんの膣内…すごくよくて…よすぎて……もぅ…イ…」
「あぅ…な、なのはっ！一緒に……一緒にイこうっ！いっしょに…一緒にヒィィィィっ！！！」
『『ぁあああぁあああああああああああああああああああああっ！！』』

(ふたたび無人世界)

――――ザッ　　ザシッ　　ザッ――――

「んっ……んむ……っ」
「……ほら、歩みが遅くなってるよ？(ぐいっ)」
「んーっ！　……ぐ…ん……」

月が見下ろす海岸を、なのはは拘束したままのフェイトを連れて散歩していた。
フェイトはホテルで調教されていたときからさらにレオタードも剥ぎ取られ、素肌に直接ベルトが食い込んでいる。一歩進むごとに股間のベルトがフェイト自身の愛液ですべり、淫核を容赦なく責め上げていた。

「ふふふ…ここなら誰も見てないし、フェイトちゃんも思いっきり散歩を楽しめるよね……そういう理由もあるから、ここに連れてきたかったの」
「(あぅ…なの、は……あり、がとう……。これで私、なのはに全てをさらけ出せるよ……い、淫乱でどうしようもないくらいMな……本当の私を…)」

なのはは、フェイトの念話での告白に満足そうな笑みを浮かべると、振り返ってフェイトにやさしくキスをした。
「んっ…私も同じ。本当に嬉しいよフェイトちゃん
――――これからも、思いっきり楽しもうね」

(終わり)

次回「やなせ画伯入魂の春画」　に続く

次回予告

「！……ち、ちょっとなのは！？」
「アハッ…ユーノ君ったらもうこんなに……気が早いなぁもぅ」
「ユーノも、エッチだね……(がしっ」
「ふ、フェイト？や…ちょっと…は、はなして……」
「ダメだよフェイトちゃん。しっかり捕まえててね？」

————さわっ

「ヒんぅっ！」
「ユーノ、すごく可愛い声出すんだね…おちんちんをさすられただけで…」
「ぁ、あぅ……」
「ふふっ、でもユーノ君のすごいところは、コッチと同じくらい——もしかしたらそれ以上にお尻でもいい声あげちゃうところなんだよ」
「な…なのはっ、そ、それはヒミt……ひぁぁっ！」
「ホントだ……お尻さすっただけですごいビクンって…」

「ん……ぐむ……ふぅ…」
「うわぁ、こんなにガチガチ……さっきフェイトちゃんの足でコスられて射精したばかりだよね？」
「萎えてたと思ったらもう……男の子ってホント、エッチだね……(ぐにっ」
「んぐぅぅぅぅっ！んむっぅぅぅぅぅ！(ビクンッ」
「わぁ、また出てきた……さっきの残りかな？」
「そうかも……でも、どうせすぐに次の射精がくるんじゃないかな？」
「んっ…ぐ…んぁ…」
「ふふっ、そうだね…。今度は私がしてみようかな……ほらユーノ君、次は私が足でしてあげるね？」
「ぐ……んむぅぅぅっ！」
「アハッ、そんなにがっつかなくてもいいよ？……ほら、臭いが解る？ユーノ君のために履き古したニーソックスだよ？これでもうすぐ、オチンチンを犯してあげるからね？」
「ぐ……んぅぅぅ…んむぅぅぅぅっ！」

次回請うご期待！

あとがき

蒸すわー　　蒸ーすーわー

……というわけでムンムン蒸し暑いこのごろですが皆様いかがお過ごしでしょうか、45ACPです。
今年は随分おかしな天気で、今原稿描いてる時点でまだ東北地方の梅雨明け宣言はありません。
そこだけ見れば「まだ梅雨明け前に原稿終わる！俺仕事速い！ヒーホー！！」くらいのことは言ってみたいんですが、まーなんていうんですか、現実逃避ってやつですよね……orz

今回は夏ということで、二人の水着でのイチャっぷりを描きたい！描くべきだったのだ！ユキ、イスカンダルへいこう、他にどうしようもないじゃないか！というのが始まりでした。でも水着で海に居たらいつものようにボンデージできない！パワーが足りない…助からない……『島、爆発の影響で都市衛星の地盤が脆くなっている、姿勢制御ロケットを逆噴射させ、弾みをつければ下へ突き抜けられるぞ！』……という思いつきで後半との分け方にしてみたわけでして。え？何か混ざってる？いや気のせい気のせい。

世間では4期としてForceやVividも始まり、劇場版も製作つづいていてーの…と、リリカル業界も相変わらず元気です。
個人的にはForceでリンディさんに出てきてもらい、その変わらぬ艶っぽさを心ゆくまで堪能したいですね。

さて次回はなのはさんのもう一人の大切な奴隷友達のユーノを加えてリリカルでマジカル且つフェティッシュでペシミズムな一冊を描きたい、描くべk(ry と思っています。
――――あ、ペシミズムってナンでしたっけ？

それではみなさん、またお会いしましょう

元レベッカ
45ACP

奥付

発行日　2009年　8月 16日
発行者　45ACP

URL　http://45acp.sakura.ne.jp/
e－mail　giro@45acp.sakura.ne.jp

This contents was printed by Tokyo Shimaya Printing.co

Mobile QR

For ADULT Only
隊長と海
-Taicho to Sea-